

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 13 日現在

機関番号：32715

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23700992

研究課題名(和文) 若者のキャリア意識向上を目的とする交流実践の開発と評価

研究課題名(英文) Development and evaluation of the career learning practice between university students and working young adults

研究代表者

荒木 淳子 (Araki, Junko)

産業能率大学・情報マネジメント学部・准教授

研究者番号：50447455

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円、(間接経費) 660,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、大学生と社会人とがキャリアについて対話するインフォーマルな交流実践を実施し、大学生と社会人それぞれのキャリア意識に及ぼす効果を測ることが目的である。インフォーマルな場での大学生と社会人との交流実践は数多く行われているが、その効果に関する検証はあまり行われていない。そこで本研究では、大学生と社会人の対話を重視した交流実践を実施し、効果について事前事後の質問紙調査と事後の半構造化インタビューを実施した。その結果、大学生の自己効力感は向上するが、社会人は一部自己効力感が低下することが明らかとなった。今後は、社会人も過去ではなく未来を展望する活動を行うことで自己効力感が高まると考えられる。

研究成果の概要(英文)：This study evaluates the effect of dialogue programs between university students and working young adults for career development. Recently, career education has been focused in higher education, informal career dialogue programs have been seen widely. Although many informal programs have done, the evaluation for them have not so done much.

This study examines development and evaluation for the informal career dialogue program for university students and young working adults. Eight university students and eight working young adults discussed their work and career visions, reflecting their past experience. We discuss the results of their discussions, being based on the results of a questionnaire and semi-structured interviews. The results show that self-efficacy of the students increased. It also reveals that working young adult's anxieties over their failures increased. It is considered that the future prospect have increased the self-efficacy for university students.

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：科学教育・教育工学

キーワード：大学生 社会人 キャリア 交流実践 自己効力感 対話

1. 研究開始当初の背景

大学におけるキャリア教育では、就職支援に留まらない初年次からのキャリア意識向上への取り組みが普及してきている(上西2007)。平成22年に日本学生支援機構が全国の大学、短期大学、高等専門学校等に行った調査では、必須科目としてキャリア科目を開設している大学は、全体の36.3%であった。また正課に留まらず、正課外の取り組みとして学生と社会人とが交流する実践も数多く行われるようになった。たとえば、NPO法人カタリバは、大学生が高校生の進路に関する悩みを聞き、自らの経験を語る実践を行っている(上阪2010)。その他、社会人と大学生とが交流する実践には「ハナジョブ」、「ハタモク」などが挙げられる。ハナジョブ、ハタモクはいずれも、企業で働く社会人が大学生のキャリア支援のために立ち上げたインフォーマルな交流の場である。これらは、インターンシップやPBLに比べ大学生が社会人と気軽に交流できる場として注目される。

2. 研究の目的

しかし社会人と学生との交流実践について、効果に関する十分な検証はあまり行われていない。また、実践には次のような問題点も挙げられている。一点目は、企業側が学生のキャリア意識向上という目的を共有していない場合には、学生のキャリア意識向上が十分はかられない点である。二点目は、社会人との交流実践では、学生同士の横のつながりや、学生と社会人との対話の重要性も指摘されるが、実践への社会人の参加メリットが見えづらく、また社会人や学生同士の横のつながりを保ちにくいという点である。

そこで本研究では、学生と社会人との交流実践について、学生と社会人との対話を重視した実践を開発し、その効果について検討する。

3. 研究の方法

(1)交流実践の開発

本研究では、学生と社会人との対話を促す実践を開発・実施し、その効果について事前事後の質問紙調査と事後インタビューによる評価を行った。

実践は2012年7月7日に予備実践を行った上で2012年12月16日に本実践を行った。本実践には社会人8名(うち女性2名)、大学生8名(うち女性3名)が参加した。社会経験のない大学生と社会人とが交流する場合には、大学生と社会人との対話をいかに引き出すかが課題として挙げられる(尾澤ほか2010)。そこで本研究では、大学生と社会人との対話を促すため、キャリア・アンカー・インタビューの手法を用いた。

キャリア・アンカーとは、Schein(1978=1991)によって考案された概念であり、職業上の自己イメージを指す。Schein(1990=2003)は、自らの仕事の価値観を振

り返ること(リフレクション)がキャリア・アンカーの自覚につながると考え、ペア同士で互いにインタビューし合うキャリア・アンカー・インタビューの方法を提唱した。本研究では、Scheinが考案したキャリア・アンカー・インタビューの質問項目の文言を大学生用に一部変え、社会人、大学生それぞれが互いにインタビューをし合うことで理解を深め、キャリアに関する対話が深まるよう工夫した。

(2)評価

実践の効果を評価するため、事前事後の質問紙調査と事後の半構造化インタビューを実施した。まず、実践の効果を測るために、事前と事後の質問紙調査で参加者の自己効力感の変化を測ることとした。自己効力感を測る指標には、一般性セルフ・エフィカシー尺度(坂野・東條1986)を用いた。セルフ・エフィカシーはもともとBandura(1977)が提示した概念であり、「ある行動をおこす前に個人が感じる『自己遂行可能感』」である。これまでも大学におけるキャリア教育では、キャリア支援として学生の自己効力感の育成が重要であること、自己効力感の育成には何らかの教育的介入が必要であることなどが指摘されてきた(中川・原口2011)。さらに自己効力感の育成には、学生参加型の体験的な要素を取り入れることや、自身の学びを振り返るプロセスが重要であることも指摘されている(中間2008)。大学生と社会人とが交流する実践に参加し、これまでの経験を振り返ることで、参加者の自己効力感は向上するのではないかと考えられる。

事後インタビューは、各グループの社会人1名計4名に対し、実践後1週間から1カ月以内に半構造化インタビューを実施した。インタビューでは大学生との交流が社会人のキャリア意識にどのような影響を及ぼしたかについて、大学生との対話で振り返ったことや新たに気づいたこと、大学生との交流の感想などを尋ねた。また、インタビュー協力者に実践を撮影したビデオの録画を見せる再生刺激法(吉崎・渡辺1992)を併用し、実践の中で考えたことや感じたことに関するより詳細な語りを得られるよう工夫を行った。評価には、質問紙、当日のリフレクション・シートのほか、社会人に対し事後に行った半構造化インタビューの逐語録を用いた。

4. 研究成果

(1)事前事後の質問紙調査

自己効力感について、回答に欠損のあった1名をのぞく大学生8名、社会人7名のセルフ・エフィカシー得点を事前事後で比較した。セルフ・エフィカシーは全16問、3因子で構成され、信頼性及び妥当性は確認されている(坂野・東條1986)。3因子とは、「行動の積極性」、「失敗に対する不安」、「能力の社会的位置づけ」であり、本研究においてもこの3因子において分析を行う。各項目とも「4.

そう思う、3. ややそう思う、2. やや違うと思う、1. 違うと思う」の4段階のリッカート尺度によって数値化した(反転項目8つについては5から差し引いた数値を用いる)。それぞれの因子における係数を算出した結果、係数は0.482~0.681であったが、先行研究において信頼性、妥当性は確認されていることから、本研究ではそのまま3因子を使用した。

大学生と社会人では事前事後で自己効力感にどのような変化がみられるかを比較するため、属性(大学生・社会人)と事前事後の2要因による二元配置分散分析(混合計画)を行った。その結果、「行動の積極性」では、事前事後の主効果が有意であった($F(1,13) = 6.674, p < .05$)が、属性の主効果、交互作用効果とも有意ではなかった($F(1,13) = 2.84, n.s.$), 交互作用 $n.s.$)。また、「失敗に対する不安」では、属性と事前事後との間に有意な交互作用効果がみられた($F(1,13) = 8.374, p < .05$)。しかし、事前事後、属性の主効果はどちらも有意ではなかった(事前事後の主効果 $F(1,13) = .205, n.s.$), 属性の主効果($F(1,13) = 2.726, n.s.$)。「能力の社会的位置づけ」においては、主効果、交互作用効果とも有意ではなかった(事前事後の主効果 $F(1,13) = .986, n.s.$), 属性の主効果($F(1,13) = 1.819, n.s.$), 交互作用 $n.s.$)。「行動の積極性」と「失敗に対する不安」について、結果を図1に示す。

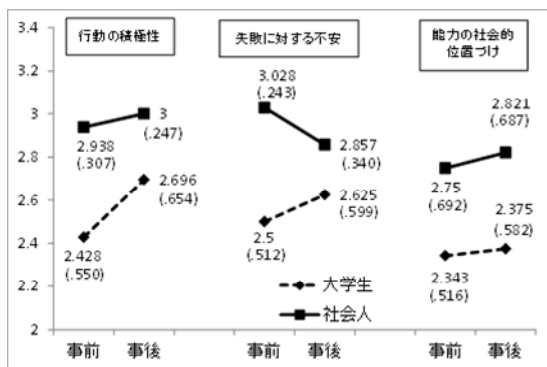


図1 セルフ・エフィカシーの分析

本研究の結果、大学生と社会人の交流実践が大学生の自己効力感を向上させることが明らかとなった。しかしその一方で、参加した社会人の中には「失敗に対する不安」などの自己効力感が下がることも見られた。社会人の自己効力感が下がる原因については、大学生との対話により社会人が自らのキャリアを内省する中で、過去の失敗などをより強く意識するからではないかと考えられる。社会人の自己効力感を高めるためには、大学生との対話の中で、社会人もまた過去ではなく未来を展望する活動を行う必要があると考えられる。

(2) 社会人に対し事後に行った半構造化イン

タビュー

質問紙調査では、大学生は社会人との交流によって「行動の積極性」が向上し、将来へのヒントや新たな気づきを得た一方で、社会人は大学生との交流が、反対に「失敗に対する不安」を高めていた。また、交流実践に対する感想では、大学生は交流を通じ、自分のキャリアの意外な一面や将来へのヒントを見つけたと回答していたが、社会人はいずれについても否定的であった。そこで、大学生との交流でなぜ社会人は「失敗に対する不安」が高まったのか、大学生との交流において社会人にキャリアに対する新たな気づきはなかったのか等、大学生との交流に関する感想について社会人にインタビュー調査を行った。

各グループから、公認会計士、税理士といった専門職をのぞく一般企業に勤める社会人をそれぞれ1名ずつ、年齢や性別に偏りがないよう4名選び、許可を得たうえで半構造化インタビューを行った。調査協力者の属性とインタビュー内容を表1に示す。

表1 調査協力者の属性

	性別	年齢	職種
Aさん	女性	28	営業
Bさん	女性	34	企画
Cさん	男性	30	経営
Dさん	男性	27	経理

事後インタビューでは、4名とも前半のキャリア・アンカー・インタビューを大学生とペアで行ったことにより、自分のこれまでのキャリアをリフレクションし、価値観を整理することができていた。そのうち3名は、新しい気づきはなかったものの、大学生に対し自分のこれまでの経験や価値観を分かりやすく説明しようとする中で、自分のこれまでの経験や仕事に関する価値観を再認識したという。また1名は、今回の実践で初めて立ちどまってリフレクションを行ったことで、自分のこれまでの経験や価値観を整理することができたという。

その一方で、大学生との対話の中でリフレクションを行うことは、自分自身の失敗経験をも振り返り語ることにつながる。質問紙調査で「失敗に対する不安」が高まっていたことは、大学生に過去を語ることで、社会人が自分自身の失敗経験をも改めて認識したからではないかと考えられる。

以上本研究では、大学生と社会人との交流が大学生、社会人の「行動の積極性」については正の影響を与え、大学生の「失敗に対する不安」には負の影響を与えることがわかった。このことは、社会人との交流によって、大学生の「失敗に対する不安」が下がったことを示している。さらに交流に関する感想では、社会人に比べ大学生の方が、社会人との

交流によりキャリアに対する新たな気づきを得ていた。自己効力感は個人の進路選択に大きく影響するものであり、自己効力感が高い学生ほど自らの進路選択やキャリアについて積極的に関与しようとする(浦上 1995)。「行動の積極性」、「失敗に対する不安」という点からみれば、社会人との交流は大学生の自己効力感を高めるものであり、実践は大学生のキャリア支援に有効な方法であるといえる。

しかし一方で、大学生と社会人との交流実践には課題もあることが明らかとなった。大学生の「失敗に対する不安」得点は上がったのに対し、社会人の「失敗に対する不安」得点は下がっていた。このことは、実践によって社会人の「失敗に対する不安」が高まったことを示している。本研究の結果だけでは大学生との交流により社会人の失敗に対する不安がなぜ高まったかについては明らかではなく、この点は今後さらに研究を行う必要がある。

また、本研究の結果から、今後大学生と社会人との交流実践を継続的に行っていくためには、社会人にとっても交流が新たな気づきや展望が得られるよう活動をデザインする必要があると考えられる。そして本研究から示唆される今後の活動デザインの方向性として、一つには、将来を展望する活動が挙げられる。大学生と社会人との交流実践は、大学生にとっては、自分の将来を語る活動となるのに対し、社会人にとっては主に自分の過去について語る活動となる。富安(1997)、都築・白井(2007)は、将来への展望が自己効力感と関連することを指摘しているが、今後大学生と社会人が交流実践を行う際は、大学生だけでなく社会人の参加者も、将来について語り展望を描けるよう活動をデザインする必要があるだろう。

また活動をデザインする際には、大学生と社会人との仕事に対する視野の違いを架橋することも必要と考えられる。大学生と社会人との対話では、見えている仕事の世界の広がりや違いから、社会人は大学生に業務を理解してもらうことの困難さを感じていた。学生と社会人における仕事の見え方の違いは、たとえば、香川・茂呂(2006)でも指摘されている。香川・茂呂(2006)は、看護学校系医療短大生を対象とし、校内学習から病院での臨地実習への移行について観察やインタビューによる調査を行った。その結果、病院での実習は学校での授業よりもずっと先を見通すことが求められるため、実習生は学校から病院への移行に困難を覚えていた。大学生と社会人との交流でも同様に、仕事の経験のない大学生と社会人とは、見えている仕事の世界の広がりや違いが異なっている。このため実践は、社会人にとって大学生との間に距離を感じさせるものとなった。今後、大学生と社会人との交流実践を行っていく際には、両者の視野の広がりや違いを考慮に入れ、大学

生と社会人との視野の違いを架橋する工夫を行う必要がある。

また本研究は半日の交流実践に留まったが、大学生と社会人のキャリア意識向上のためには短期の実践だけでなく、長期にわたる交流が必要であると考えられる。これらの点については今後の課題とし、引き続き研究を行ってきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 1件)

『大学生と社会人によるキャリア意識向上を目的とする交流の実践と評価』, 査読有, 荒木淳子・見館好隆・橋本諭, 産業能率大学紀要第 34 巻第 1 号, pp.57-70, 2013.

[学会発表](計 3件)

『社会人のボランティアな学習に関する研究 “ Socla プロジェクトのボランティア・サポーターに着目して』, 荒木淳子・高橋薫・藤本徹・山内祐平, 日本教育工学会第 29 回全国大会(秋田大学)講演論文集, 査読なし, ポスター発表, pp757-758, 2013.

『大学生と社会人によるキャリア意識向上を目的とする交流実践の開発と評価』, 荒木淳子・見館好隆・橋本諭, 日本教育工学会第 28 回全国大会(長崎大学)講演論文集, pp819-820, 査読なし, 口頭発表, 2012.

『大学生と社会人によるキャリア意識向上を目的とする交流実践の開発と評価』, 荒木淳子, 日本教育工学会第 27 回全国大会(首都大学東京)講演論文集, pp847-848, 査読なし, ポスター発表, 2011.

[図書](計 1件)

荒木淳子・伊達洋駆・松下慶太『キャリア教育論』慶応義塾大学出版会, 2015 年刊行予定

6. 研究組織

(1) 研究代表者

荒木 淳子 (Araki, Junko)

産業能率大学・情報マネジメント学部・准教授

研究者番号: 50447455